有機農業の技を一般農家にも 応用できる技に高めたい



二本松有機農業研究会会員のほ場研修



コシヒカリ 無肥料栽培の稲

1

と故村上周平氏を先頭にした福島愛農会グループがありました。 会へ導かれたのでした。 有機農業の道を示され、 として経済至上主義の農業でなく真実に生き、 さと人生の生くべき道 970年代初頭、 ..は農業を始めて50年以上、農業以外のことはほとんど知らな 50年前に全国愛農会との出合いで、農業の大切さ、平和の尊 福島愛農グループで有機農業を学ぶ 自然農法を主とした熱心な人たち 福島県で安全な農業を目ざすグループとし (聖書の真理に生きる)を学び、その実践 当時発足して間もない日本有機農業研 (個々に活動していた) 健康と環境を守る

会長小谷純一先生、

楽照雄先生、

自然農法の福岡正信先生、

その人たちが協力して、各種団体や消費者に呼びかけ、全国愛農

大内信一(おおうち しんいち)プロフィール

1941年 福島県二本松市生まれ

1956 年 家業の農業を始める

1965 年 全国愛農会との出合い

1979 年 二本松有機農業研究会を設立

2016 年まで二本松有機農業研究会会長

2012年3月、日本有機農業研究会幹事に就任、

2018年3月に同会理事に就任し現在に至る

私の経営

稲2ha、路地野菜2ha、雑穀、大豆、小豆、 小麦1ha(すべて有機認証取得)

『百姓が書いた 有機・無農薬栽培ガイド: プロの農業者から 家庭菜園まで』

コモンズ/1600円+税

※本誌 2017年1·2月号 27ページBOOK欄参照



生方を福島にお呼びして何回も学びを繰り返したのでした。平博四氏、梁瀬義亮医師等、日本の有機農業の先達といわれる先

形県高畠町の農業者も共に学んだこともありました。婦人部、生活改善グループ、一般消費者と多彩でした。また、山当時の参加者は、農業者はもとより生活協同組合関係者、JA

3 二本松有機農業研究会の発足

生産に専念できるような態勢が40年以上続きました。 農協職員が事務処理、 部会として二本松有機農業研究会が、愛農会員や生活改善グルー 農民の思想(心)も欲しいと言われたのが今も心に残っています。 私たちは東京で産直を始めたが、単なる農産物だけでなく、農村、 ながら、 松にも東京から生協の役員さんが来られました。共に農作業をし プ員や友人知人も誘 歩として我々の有機農産物の提携が始まりました。農協の生産 このことがあって、農協と都市生協との提携が始まり、その第 んでおり、 私たちが始めたばかりの有機農業を熱く語ったところ、 JA婦人部も生活改善運動や粉せっけん運動に活発に取 都市と農村の協同組合交流事業があり、ここ二本 売上代金の精算等を行い、我々が農産物 1978年、 10数名で発足したのです。 0)

がら継続しています。した。都市生協との提携は、紆余曲折はありましたが形を変えなした。都市生協との提携は、紆余曲折はありましたが形を変えな農業研究会は、一般社団法人として独自の道を歩むこととなりましかし、2年前に農協が大型合併をしたのを機に、二本松有機

物を消費者グループや生協に配達するシステムがつくられ、今もれが地元での本格的な提携の始まりとなり、生産者が交替で生産安全な農産物を求めていたグループとの出合いがありました。こ時は同じ頃、地元生協と福島市の団地で、まちづくりを通して

収穫祭や交流会が行われています。 続いています。顔と顔の見える関係として、共に集っての援農、

4 私の経営

て多品目栽培としました。いという思いが強く、あらゆる作物をつくり、自給を第一義としの、そして、ここで栽培できるものはすべて自分で培って食べたど迷いなく農業を営んだのです。農業をするなら自分で食べるも私は16代続く農家の長男として生まれ、農業が好きで、ほとん

することで、経営の確立にもつながりました。収穫の幅を広げました。そのように多くの栽培できるものを販売だったビニールを入手して、苗づくりやトンネル栽培を取り入れ、野菜が少ないのに気づき、当時はあまり出回っていなかった貴重東北では春寒く、苗づくりや種まきも遅く始まるので、春先の

栽培に取り組みやすい状況であったのです。野菜栽培を心がけていました。そのことが多品目栽培と共に有機に注意するよう強く言われていましたので、農薬が少なくてすむで、蚕が主な収入源でした。祖父母から蚕に害の出る農薬の使用で、和までのわが家の経営はまわりと同じく、米、麦と養蚕が主

ことでした。
ことでした。
ことでした。
ことでした。
ことでした。
これは我々農業者自身の問題ではないのかという思っていたが、これは我々農業者自身の問題ではないのかというまで有機栽培、農薬の害を避けたいのは食べる人たちの要求だと肥栽培となり、病害虫予防にと薬剤散布をする。暑いさ中、妻と肥栽培となり、病害虫予防にと薬剤散布をする。暑いさ中、妻とにした。
多収穫をねらうと多の稲の見学や研修会に足を運んでいました。多収穫をねらうと多い稲の見学や研修会に足を運んでいました。

農薬を直接扱っている我々の健康に良いわけはない。妻のお腹

用を止めました。 はないと、きっぱりその場で散布をやめ、以後、一切農薬の使はない。そのことを気づかされ、そうまでして米を余計に穫るこ流れ、海に至る。環境破壊につながる。自然と共存できる農業でには子どもがいる。田畑に散布された農薬は生き物を殺し、川に

ごうご。 だらの話がやっと理解できたのです。前に進んだ一歩、約50年前たちの話がやっと理解できたのです。前に進んだ一歩、約50年前だちの話がやった。

5 曲がったキュウリと虫食いキャベツの話

直ぐなキュウリや虫のいないキャベツ、無農薬でできるはずがなウリと虫のないきれいなキャベツを届けた時である。こんな真っりますが、時々良すぎてのクレームもあります。真っ直ぐなキュもちろん、天候不良や手入れ不充分で見た目の悪い野菜の時もあ有機農業で苦労して育てた野菜でも、時々クレームが来ます。



は曲がり、キャベツは虫食いが当は曲がり、キャベツは虫食いが当たり前という思い込みが消費者にもかし我々は、農業のプロです。しかし我々は、農業のプロです。をつくろうと努力、研鑽しなければと思っているのです。農業者も、ばと思っているのです。農業者も、非来ベツは虫食いが当たり前といキャベツは虫食いが当たり前といきなうような甘えを捨てなければ技術

向上はないと思います。

0

には東北では温床での育苗と、4月頃定植した後はベタがけ等 うのはぜひ食べてほしいのですが、甘えだけでは成長しません。 簡単な覆いで寒さを防ぐことで達成できます。 目指せば、 ~3回位は必要となり欠かせません。春は6月初旬までの収穫を で、苗を守るために虫害を防ぐ工夫と成育中の手での虫取りは1 ます。ただ、秋から冬にかけての収穫のものは夏の育苗となるの すが、東北では冬から6月初旬までの収穫では良品が容易に穫れ する等、基本技術をしっかりするのが良品生産のコツです。 ていねいにして、 病気や曲がり果が多く出ます。土づくりをしっかりとして整枝を キュウリは果菜の中でも収量が多く、 キャベツは時期を選びます。真夏のキャベツの無農薬は大変で もちろん、天候不良等で良品ができない時もあります。そうい 虫の苦労はほとんどしないでできます。それを目指す 朝夕1日2回収穫する。適果、 栄養過多でも栄養不足でも 摘葉もこまめに

6 適地適作、適肥適作、適期適作

い、という疑問のクレームです。

を、繰り返していました。 さ、繰り返していました。 適地適作は昔から作物栽培の基本といわれていますが、私はそ とを、繰り返していました。 適地適作は昔から作物栽培の基本といわれていますが、私はそ とを、繰り返していました。 適地適作は昔から作物栽培の基本といわれていますが、私はそ

そこで、キュウリとナスは条件が許す会員は面積を増やして多





深水栽培のイネ

期には市場出荷としました。そのためには、良品生産と選別作業 拡大を図りました。 を高めることが大切になります。皆で生産技術を高めながら生産 く作付けして、 余ったものは市場出荷としようということで最盛

という甘えを捨て、 作と輪作を上手に組み合わせて、 害が少なく、きれいなカブがとれるということに気づき、ネギと の輪作にしています。曲がりや虫食いの野菜が無農薬で当たり前 で大好物のようです。そのうちネギのあと地に作付けすると虫の 輪作をしてもキスジノハムシの害が増えてきます。 またカブ等は、野菜づくり初めての畑はよくできるのですが、 適地適作、 適肥適作、 良品生産に励みたいものです。 旬を大事にする適期適 カブは甘いの

東北の米づくり

試行錯誤の年月

北は冬の寒さもあり、 無農薬の稲作りは病虫害少なく、 除草

> り、稲づくりでした。 良いと思ったことはすべて取り組み、 問題が解決できればと試行錯誤を繰り返してきました。これ 除草、 抑草に励んだ米づく

に殺されての終了でした。 たりと苦労が多く、10年目には一晩ですべてのアイガモがキツネ 以降からは、 除草は解決したと思うほど、きれいに除草されましたが、2年目 アイガモ除草 ― いち早く取り組み、 アイガモの動きが悪かったり、 最初の年はアイガモで水田 ネット外に逃げだし

それに水田の生物がいなくなる。 なるのも気になりました。 ヒナ育てやネット、電気柵張りの苦労だけが残ったのでした。 稲がフン等によりチッソ過多に

米ヌカ除草 ― これも期待して一生懸命取り組んだのですが、 な年に米ヌカが多く入った部分はイモチ病の大きな被害に見舞わ を生やすための米ヌカ散布かと思うほどでした。また、天候不順 試みたのですが、散布した後はコナギが旺盛に成育して、コナギ 地には良き効果がなく、量を加減したり、ふる時期を変えたりと 断念しました。

く株間の除草はうまくできませんでした。 た。その後、2条の株間除草機も導入しましたが、 について歩くのも大変で、特にUターンする時の重さは大変でし 械除草を用いました。しかし歩行型ですので、田んぼの中で機械 た。いろいろな除草を試しても、それで草が生えれば4条式の機 機械除草とチェーン除草 ― 除草の主役はエンジン付除草機でし 条間はともか

きず断念しました。 ると効果がなく、 チェーン除草も種々試作して試しましたが、 初期除草の大切さを感じましたが適期作業がで 草が少し大きくな

イネと大豆の輪作

まったく売れなくなり、断念せざるを得ませんでした。大豆の補助金も少なくなり、原発事故の影響で有機栽培の大豆も水田も大豆も除草の苦労は格段に少なくなりました。ところが、みました。大豆の水田作付けは排水対策が重要ですので、上畦にみました。大豆の水田作付けは排水対策が重要ですので、上畦にあり、集落の休耕田も合わせて私の水田も大豆との輪作に取り組画産大豆の需要が高まり、国の大豆生産補助金(集団転作)も

無肥料、無農薬のイネづくり

機栽培を行っている青年がいました。矢先、隣町に、愛農高校卒業生で親の後を継ぎ、広い面積での有矢先、隣町に、愛農高校卒業生で親の後を継ぎ、広い面積での有イネづくりを後継者が引き継いでくれるのだろうかと思っていた以上のような除草で苦労している折り、こんなことで無農薬の以上のような除草で苦労している折り、こんなことで無農薬の

組み合わせていました。

10年ほど前の彼の田んぼは、あまりの雑草の繁茂でコンバイン10年ほど前の彼の田んぼは、あまりの雑草の繁茂でコンバインが正常に移働しない状況でした。それでもあきらめることなく、が正常に稼働しない状況でした。それでもあきらめることなく、が正常に移働しない状況でした。それでもあきらめることなく、が正常に移働しない状況でした。それでもあきらめることなく、

きるとは私にとって目からうろこでした。く、立派にイネも稔っていました。無肥料でこれほどのイネがで、無肥料8年目の水田を見せてもらいましたが、草がほとんどな

ていました(原発事故後で福島の米が売れるのかの頃でしたのに一般米として出荷しても採算のとれる米づくりを目ざすと言っ彼は無農薬で無肥料、コストはほとんどかからないので、農協

ないくらいに雑草は少なく、まずまずの収量です。んの技術を採り入れ、ここ数年は、除草剤を使った田んぼに負けで)。私の息子も彼と交流があり、彼の技術や栃木の舘野廣幸さ

水力のある水田にする工夫が必要です。使う等、苦労しておりますが、畦をしっかりして漏水を防ぎ、保液水栽培の効果は大で、保水力のない水田は除草機を集中的に

舘野さんのいう自然の営みの妙なのだろうか。てほとんど大きな被害はありません。天敵が増えたのだろうか。ただ畦の草刈りをていねいにしたくらいでしたが、今は虫も減っ害で悩んだことがありました。しかし、ほとんど対策もしないで、また、私の水田でも一時的にイネミズゾウムシやカメムシの被

8 原発被害の中から ― 反原発は福島から

になるほどでした。の作物には放射能セシウムが100ベクレル以上も出て出荷停止が、原発事故は対処の方法もまったく知らず、右往左往し、一部国といわれたので、地下は岩盤で地震の被害は少なかったのです手想だにしなかった大地震と原発事故。私の地方は昔、岩代の



「猫の手」の田植え

安全な食物など、つくてここで農業が続けられるのだろうかというれるほどでした。出て新天地に移住する出るほどでした。とすると言うと、放射をすると言うと、放射をすると言うと、対けらいた。

多くの先生方がかけつけ、放射能の恐ろしさと共に対処方法等も れるはずがないという声に苦しめられました。それでも全国 指導いただき、力を与えられました。

をした結果、 ていく決断を与えられました。 自分や会員の田畑の土や作物を、できるかぎり多く放射能測定 作物の強さ、賢さに気がつき励まされ、ここで生き

で、春と秋の2回、福島に来ていただき農作業を共にしながらの 交流には、 めにと各種農機具の提供を受け、また「猫の手作戦」ということ そんな中、日有研の東北支援活動として、我々の健康を守るた 大変励まされ、 、力となりました。

9 農地でエネルギーを ―ソーラーシェアリングの取組み

福島で原発事故の苦しみ 脱原発を強く願

て地域から日本から化学肥料や農薬を減らし、健康と自然を守り

一般農家でも活用できる技術となっ

我々の栽培技術を高めて、



農業振興にも役立つことを も取り組みたい。それも農 の中で、 地を生かし、活用しながら 起こしエネルギーの生産に したい。最初、バイオマス ていましたが、何か行動を

迷っている時にソーラーシ があることを知りました。 発電の研修、視察を行いま では大変なことがわかり 維持管理も大変で我々の力 したが、 アリング(営農型発電 初期投資が莫大で

> 野菜を試作しましたが、問題なくよく育ちました。今年は大豆の り、下で作物を育てる方式で、農機も活用でき昨年の夏に完成し、 作付けを予定しています。 の畑に設置しました。畑の上2~3mの高さに太陽光パネルを張 見学と指導を受け、二本松有機農業研究会として第1号機を私

役立てたいとの夢を抱いています。 の利益は、農地を守る活動や新規就農者の受け入れと自立のため ーと農産物の自給を目ざす活動として歩み始めました。そこから 多くの人たちの参画による発電事業で脱原発を共有し、エネルギ この建設には都会からもパネルサポーターとして参加いただき

おわりに

にも、 まれているという、古の農民預言 和の理想として国連の門柱にも刻 を記して終わりとします。 者(ミカ)が残した旧約聖書の言 たい。有機農業での安定生産を図り、 世界の平和を祈る、 世界平 自給を高めたい。そのため

国は国に向かって剣を上げず もはや戦うことを学ばない 槍を打ち直して鎌とする 彼らは剣を打ち直して鋤とし

